自分が生きた集落の近現代史である。なかでも、はしがきに「私が今までの人生の中で一番感知していることは、抑留中のことです。それは、シベリアで寒さと飢えに耐えつつ、腹をすかせている身体に、南京虫とシラモに攻められる毎日であったことです」とあり、抑留時代の苦労が知られる。

「思いで」の章では、複式学級でのわんぱくぶり、いじめっ子の話、炭焼きの話、徴兵検査、最初の兵役（昭和四）、二度目の兵役（昭和十五）、三度目の兵役（昭和十九）、四度目の兵役（昭和二十）、武装解除と抑留、抑留中の作業と食事、舞鶴への帰還、妻の病死（結婚二三年、うち同居一五年）、村会議員の体験などの、暮らしぶりを具体的に描いている。

「ふる里おぼえ書き」では、歌舞伎踊りと神楽、踊りと神楽の歌詞、三味線の練習などを紹介している。いうなれば、桑原氏の戦後の暮らしを描いた章である。

第三は、大塚喜一郎氏編集の『五十沢歌舞伎の人々』（昭和五十八）である。編集者の前書きによれば、五十沢谷の東部に伝わる五十沢歌舞伎は、江戸時代の末期に藤村関十郎によって集大成された。数度の中断を経て、昭和五十四年四月に五十沢小学校で公演した。中村時次の追善供養と昭和四十四年災害の復興記念を兼ねて、二日間行った、という。

目次には、五十沢歌舞伎の由来、役者の横顔、組織と興業、興業の名目、興業（たて）元と芝居小屋、今回の興業、五十沢歌舞伎名場面集、などを載せている。芸能との関わりで地区の歩みを紹介した冊子として、貴重である。

また、役者三一人の紹介、雪上に特設する節句芝居の芝居小屋、最後の記念公演の名場面（鎌倉三代記、菅原伝授手習鑑、一谷生田の森、伽羅先代萩、源平布引の滝、絵本太閤記十段目、近江源氏先陣館、安達原三段目）、などを写真入りで詳しく紹介している。

2　城内地区の刊行物

（1）地区の概要

当地区は、魚野川の支流宇多沢川に沿って、集落が散在する。近世には六日町組六六か村のうちで、二五か村を占めた。明治二十二年、深沢を除く二四か村が、二か村に合併した。北城内村（麓、長森、長森新田、上原、上原新田、下原、下原新田、泉、泉新田、泉孫新田）、南城内村（新堀、新堀新田、田崎、法音寺、藤原、妙音寺、野際、下薬師堂、上薬師堂、下出浦、上出浦、岡、山口、明川新田）。明治三十四年、二か村が合併して城内村（役場は上原）となり、昭和三十一年に六日町（役場は六日町）へ合併した。

（2）地区の民俗と歴史

地区の民俗・歴史に関わる冊子は四冊ある。まず、村長、俳人として活躍した井口静波氏の遺稿集である。『遺稿城内史料　附静波文藻』とあるように、城内地区のあゆみと、静波氏の作品抄から構成されている。没後の昭和二十八年、静波遺稿集刊行会の貝瀬幸咲氏が中心となって発刊したという。

【図２】城内郷土誌

目次には、歴史の概説、人口戸数、古碑・城跡・古戦場・古文書、訴訟資料、大字の沿革、伝承、教育、寺社沿革、などが並ぶ。なかでも、近世の資料として、泉村の五人組帳（天和二、貞享四）、伊奈兵右衛門の八海山入会裁許（元禄元）、藤原村の七福神講（安永七～完成元）、などの解読文が載る。

ついで、昭和三十四年には、城内郷土史刊行会（編